

# 調査から見た相愛女子短期大学・生活学科における学生像

－ 1996年カリキュラム作成のための基礎調査から－

竹 田 美 知  
水 野 浄 子

## 序

平成8年度学校基本調査速報によると、女子の大学への志願率は、短期大学への志願率を調査開始後初めて上回った。(図1) さらに当年の女子の入学者数についてみると、大学(学部)の入学者数が、短期大学(本科)の入学者数を昭和28年度以来42年ぶりに上回り、20万8千人と初めて、短期大学20万人を超えている。(図2) また、図3のように、平成8年度の短期大学・高等専門学校から大学への編入学者は、過去最高の9千人となっている。

このような状況で、少子化によって学生数が減少する中で、短大を廃止し、4年制大学新設したり、男女共学化をはかる大学が相次いでいる。今まさに短大や家政系の意義が問われる時代になった。本稿の目的は、このような状況を踏まえて、学生サイドから見た家政系の意義や短大の意義を明らかにすることにある。本校は1995年度から生活学科と名称変更をしたが、今回の調査対象者はこの名称変更後、入学した学生達である。また高校の男女共修も完全履修を1年後に控えて、相当数の高校で行われてきている。そのような中で、学生達がなぜ家政系を選択し、短大に進んだかを調査によって明らかにしたい。

本稿は、主に相愛女子短大生を母集団としたデータを扱うが、調査時期、調査方法、調査対象は下記のとおりであった。

## 調査の概略

調査時期	1996年5月から7月
調査方法	質問紙法・調査用紙配布・無記名
調査対象	生活学科 食物1年生・2年生 衣生活1年生・2年生
対象総数	生活学科 食物1年生 182名 2年生 70名 衣生活1年生 129名 2年生 50名
回収総数	生活学科 食物1年生 167票 (回収率91.76)

調査から見た相愛女子短期大学・生活学科における学生像

2年生 60票 (回収率 80.62)

衣生活1年生 104票 (回収率85.71)

2年生 42票 (回収率 84.00)

図1 大学・短期大学への現役志願率の推移

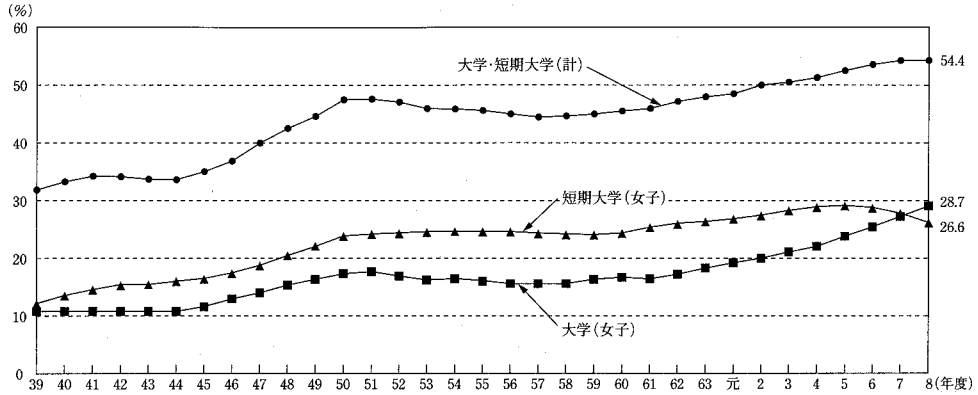


図2 女子の入学者数の推移 (大学・短期大学)

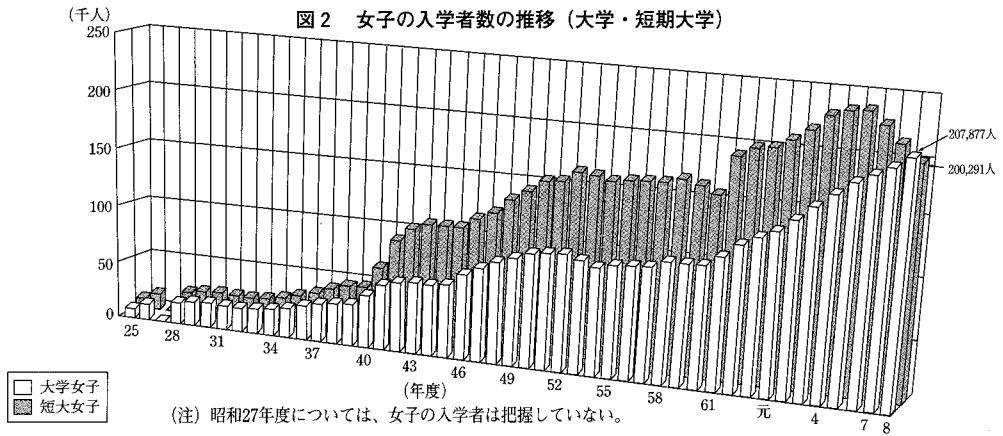
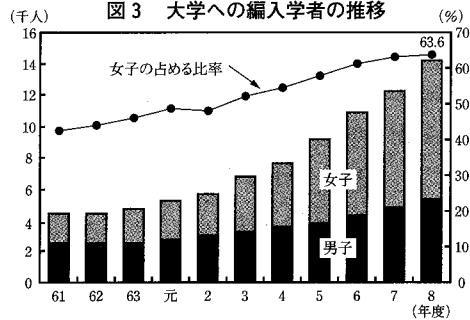


図3 大学への編入学生の推移



### 〔調査対象学生のプロフィール〕

出身高校は、公立が約46.6%、私立が52.5%と若干私立高校出身者の方が多い。男女共学で履修してきたかどうかについては、共学48%、別学49%とほぼ同じ割合である。短大生の特徴でもあるが、自宅通学生が約90%を占め、大阪近郊に居住しているものが、大多数を占める。父親は44歳から54歳の団塊の世代が大多数を占め、母親も41歳から54歳の同世代である。共働きの世帯は、53.1%で専業主婦の家庭の25.7%をはるかに上回っている。その内訳は、フルタイム10.5%、パートタイム24.9%、自営業17.6%とこの世代の女性の就業構造を反映しているが、特徴的なのは、自営業に従事している母親が多いことである。

### 〔家政系短大を志望した理由〕

自分から相愛女子短大生活学科を志望したという者は、約81.5%と大多数を占めるが、親の勧めで志望したものも21.7%にも上る。特に母親の意見が進路選択の時大きな力を持っている。友人の勧めは9.9%、進路の先生の勧めで6.4%とそれに続いている。(表1)先生よりも、同世代の仲間のインフォーマルネットワークを情報源として利用している。非積極的理由もかなりあがっている。推薦で入学を決めたいという理由が53.4%と約半分があげ、また他に行くところがなかったという理由も32.7%が答えている。家政系短大へ何を期待してきたか聞いたところ、専門知識と答えたものが、表2のように72.9%を占め、次に、卒業資格と答えたものが66.2%、教養を身につける49.3%、資格41.6%と続く。意外に少なかったのは四年制大学への編入に関してだが、相愛大学や推薦編入できる大学の中に、生活学科がないことも大きく影響していると思われる。

### 〔短大と4年制大学との比較〕

期待された専門性に関しては、表3のようにさほど差を感じていないようだ。(どちらともいえないと答える者も合わせると差がない者は、約78%である。)4年の内容を凝縮して学んでいると感じている。そこでさらに詳しく授業内容について短大と4年制で違いがあると思うかどうか聞いてみた。差があると少しでも感じる人が多いのは、資格に関して(41.6%が回答)、応用的なことについての学習(31%)、実験自習的なこと(30.6%)であった。差をほとんど感じてないのは、基礎的なことについての学習である。短大が凝縮したカリキュラムを維持するために、講義時間が多すぎると感じ、中・高に近いと答えるものが、53.4%にもものぼり、必修科目が多いこと(45.8%)がその理由としてあげられている。

このことはカリキュラムだけに原因するだけでない。出欠の取り方や授業の雰囲気も大きく短大が中・高等学校のイメージに近いということに影響を与えている。表4のように約64%の者が、中・高等学校と同じ出欠や授業の雰囲気に近いと感じている。またこのような凝縮したカリキュラムの中で、先生とのコミュニケーションの時間はクラス制をとって

表1 短大選択理由

■ 複数回答

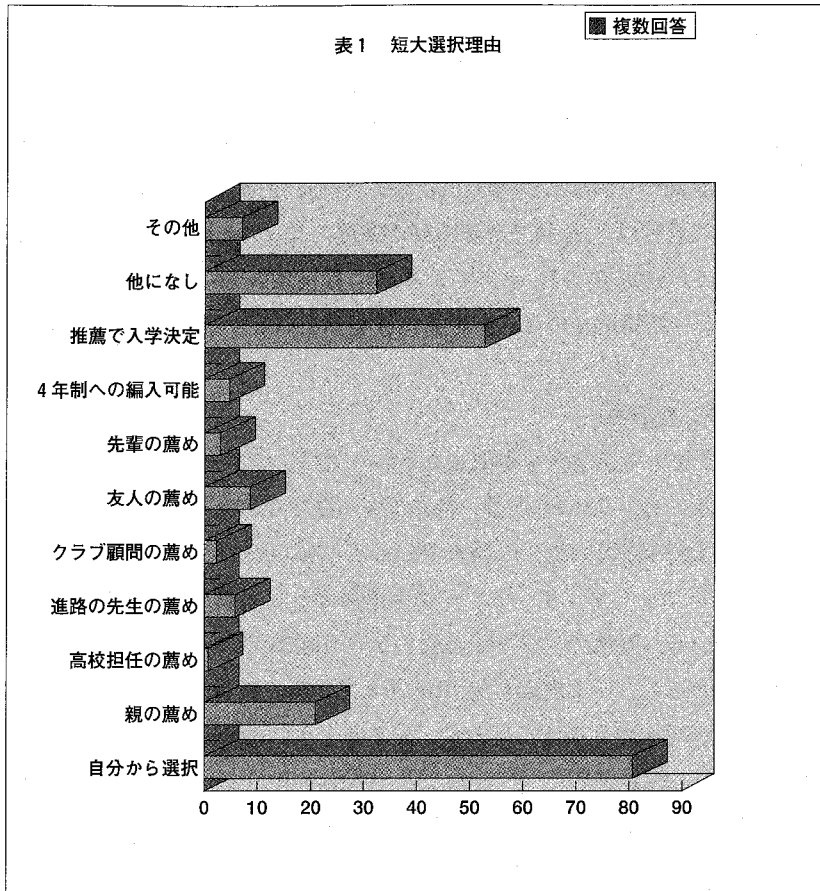
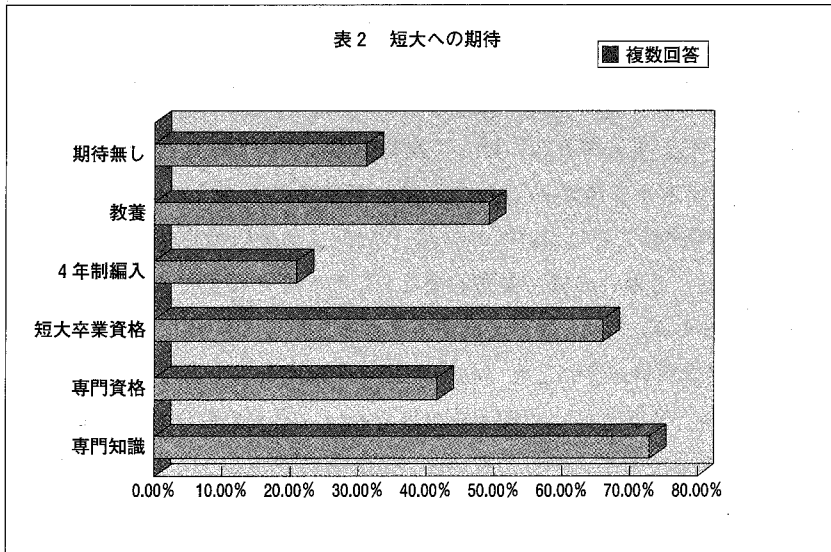


表2 短大への期待

■ 複数回答



いるにもかかわらず、高校時代と同等には確保されていない様子もうかがえる。

#### {短期大学における学生生活}

短大生に勉強と友人・サークル活動との比重を聞くと、友人。サークル活動を重視するという回答が得られた。しかし優の比率を気にしたり、就職のよいことにこだわる傾向もみられ、講義の内容や数よりも、講義の結果出てくる成績を重視する割り切った考え方もうかがえる。

#### {短大で学びたい家政系の内容}

「とても学びたい。」「やや学びたい。」を合わせて50%を超えた分野は食分野（86.8%）と一番高く、続いて生活情報分野（64.1%）、生活設計分野（55.8%）、衣分野（55.8%）、生活経営分野（54.2%）であった。（表5）50%に満たなかった分野は、住生活分野、教育分野、生活環境分野、生活文化分野、生活資源分野であったが、これらは40%以上の者が学びたいと答えており必ずしもその存在を否定するものではない。ただ、調査回収票に食物学科学生が多いことも影響していると推測できるが、食に関する興味が非常に強いことが、「とても学びたい」と答えた者が56.2%に上ったことをみてもわかる。またこれらの学びたい内容に、情報化や高齢化などこれからの生活を考える上での重要なテーマが含まれていることも注目に値する。

視点をかえて、家政学とイメージの異なった意外な科目をみてみると、約45.5%の学生が意外な科目を上げている。意外な科目は、住生活論（43名）、生活文化史（24名）、生活情報処理（14名）、人間と宗教（11名）、衣生活論（11名）などの講義科目である。これらの科目については、実習に重きを置く高等学校の家庭科で学んだ分野との関連を学生サイドでは付けがたいと思われる。科目の中には、高校ではまったく履修しなかった分野もあることがわかる。生活学科全体で「生活学とはどういう勉強をするのか。実習、実験科目と講義科目とどのように関連するのか。」といったなど生活学全体を総合的に把握させるための生活学基礎ガイダンスを綿密に行う必要がある。

#### {学生のイメージする家政学—生活学}

家政学—生活学を学んでよいと思っていることを自由回答で聞いたところ、約58.2%の学生が答えた。一番多かった回答は、「調理に関する知識・実習を学べたこと～71名」であった。次に多かったのは、「将来、日常生活に役に立つことが学べたこと（カロリー計算、ダイエット調理法、栄養、食品加工など）～70名」であった。これらの結果は、先に紹介した「短大で学びたい家政学の内容」で大多数を占めていた食分野（86.6%）の内容と符合する。特にその中でも、実技・実習面に対する評価が高いことがうかがえる。現在高等学校

表 3

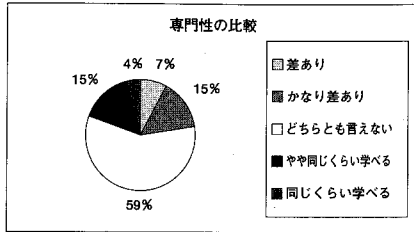


表 4

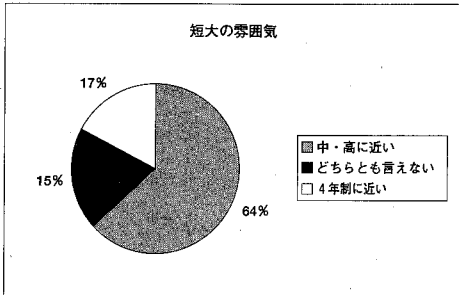


表 5 家政系短大で学びたい内容

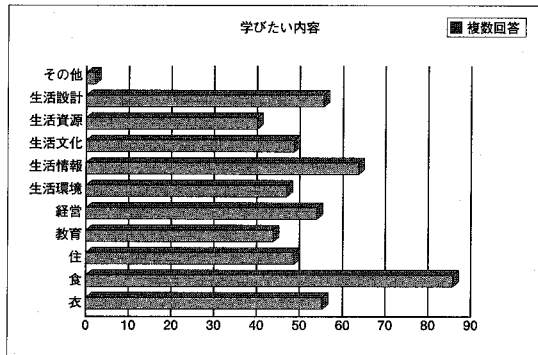


表 6 小・中・高校における家庭科の目標

小学校	ひとりの人間として、また家族の一員として、日常生活に必要な衣・食・住などに関する基本的な技能を、児童の実生活に即した活動をして養うとともに、家庭生活の中で自立し、家族と協力できる能力を育てる。
中学校	家族の構成員として、日常生活に必要な衣・食・住・保育・家庭の福祉に関する基本的な知識と技術を、実践的な活動を通して習得させるとともに、家庭生活ならびに近隣との生活を合理的に営む能力を育てる。
高等学校	家庭経営の主体者として、日常生活に必要な衣・食・住・保育・家庭の福祉などに関する基本的な知識と技術の応用能力を、創造的な活動を通して養うとともに、家庭生活ならびに地域・社会生活を総合的に営み、人間生活の向上発展に貢献できる能力を育てる。

までの家庭科教育で問題点として指摘されてきた、「生活体験が乏しく、生活面での自立が心配であるという現状」に対して、家政学—生活学が充分答える内容を持っていることがわかる。その傾向は衣生活分野に関する実習に対する評価にもあらわれている。「服・型紙などを作る。～22名」といったように、実習に対する関心の深さは、衣生活についても同様である。科学的・専門的知識に関しては、「栄養学や食物に関する知識～29名」「服飾に関する知識～8名」のように実習ほどは評価には現れないが、支持されている。

このような調査結果から、学生のイメージする家政学—生活学は学生の日常生活に密着した領域や指導方法が望まれているように推察される。短大への期待として専門知識を上げながらも、その専門知識は職業生活における専門知識よりも、どちらかといえば、家庭生活における専門知識を深める方向に学生は「家政学—生活学」をイメージしている。だから、「将来、家庭を持って役に立つ～14名」と家政学—生活学の対象領域が家庭という範囲にとどまる傾向にある。

しかし大学・短大における家政学・生活学の領域は、単に家庭の中に止まるものではない。今日の私たちの生活は家庭機能の外部化、社会化によって支えられている。それゆえ、家庭生活と生活環境・外部社会との緊密な連関をコーディネートするホーム・エコノミストの役割がますます重要になってきている。表6は小・中・大の家庭科の目標を比較したものだが、家庭科においても、家庭生活から近隣との生活、地域・社会生活へと生徒の視野を広げていっているのがわかる。このような発達の観点からも大学・短大における家政学—生活学は学生の家政学—生活学に対するイメージを身近の生活から広げてより大きい生活単位との相互作用という観点を説明する必要がある。

#### {短大で学んでよかったこと}

先の質問で短大生の学生生活について聞くと勉強より、友人・サークル活動に比重をおくものが多かったが、「短大で学んでよいと思っていること。」を自由回答で聞いた場合にも、一番多かったのは「友人との交流～9名」であった。次に「2年間で集中できる。～6名」、「資格がとれる。～4名」と学習内容に触れる者は少なく、友人関係や制度的な内容を評価する者がほとんどである。

#### {学んでいる状況で不満足なこと}

過去に学んでいた状況で不満足なことがあったものは、全体の約29%にもものぼった。(表7) その不満の中身を自由回答で聞いてみると、「必修科目も多いし、クラス単位で高校とあまり変わらない。出席関係も厳しい。～10名」とカリキュラム設定に対する不満が一番多かった。ついで「専攻にあまり関係のないことを必修に入れないでほしい。～9名」、「もっと種類を増やして自分の好きな科目がとれるようにしてほしい。～4名」、「自分の学

表7 過去の不満な状況

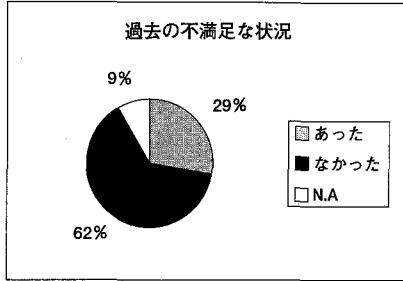


表8 過去の不満の解決方法

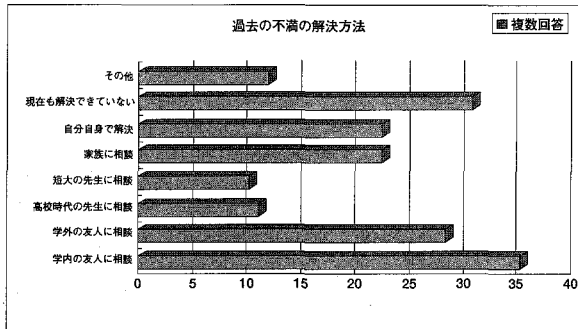
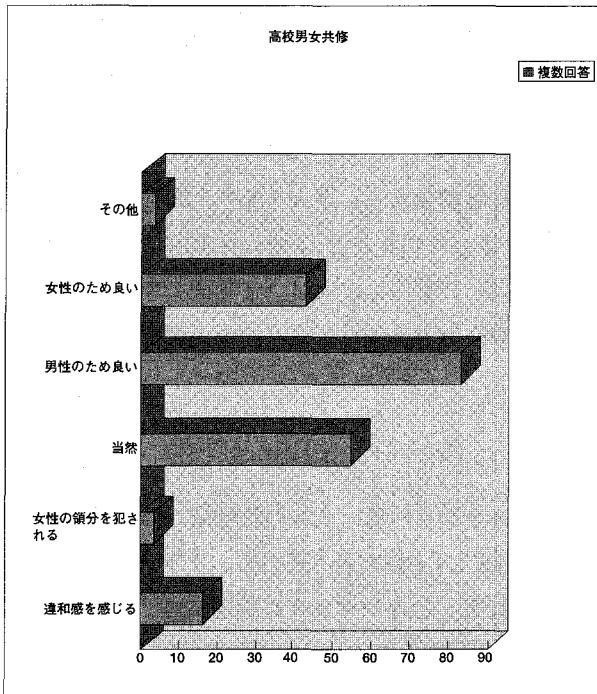


表9 高校の男女共修についての意見





びたい講義があまりない。～4名]、「おもしろくない。～6名]、「意味のないことを、学んでいる。～4名]、「講義が多い。～4名」といった科目の中身に対する不満が多かった。もちろんこの不満は、学生自身の進路決定時における判断ミスから生じているケースもある。例えば、「別にこの学科に進もうと思っていなかった。～7名]、「本当は大学にいきたかった。～4名]のように専攻や大学を選ぶ時点から不満の原因を内包して入る様子もうかがえる。しかし大多数をしめる不満の内容は、短大に進学したのに、学習形態や選択科目の設定が高校と同様で変わり映えがしないことにある。高校が、総合学科や単位制を取り入れて生徒の選択の可能性を広げる中で、短大においてにおいても、自由な科目選択を学生がより望んでいることが分かる。

興味深いのは、この不満を誰に相談するのかということであるが、表8のように約35.5%が学内の友人、約28.4%が学外の友人と答えているところから、約半数以上が友人を相談相手に選んでいる。また次に多いのは、家族であり(22.4%)、4番目に短大の先生(10.2%)がやっと上げられている。問題なのは、不満が解決せずにそのままになっている学生が30.8%いることである。この解答から推察されることは、学習やカリキュラムの送り手である短大サイドが不満の相談相手としてごく少数しか選択されていないところである。ここでも友人ネットワークが活躍しているが、学外の友人にも相談している人が多いところを見ると、他校のカリキュラムとの比較も当然行われている。短大サイドにおいてもこのような学習上の相談に常時応じることができるような、ティーチング・アシスタントなどの制度を考える必要があるのではないだろうか。人間関係や精神衛生上の悩みに対しては、学生相談のシステムがすでに作動しているが、加えて短大のように2年間という短期間で忙しいカリキュラムを設定せざるを得ないならば、十分なカリキュラム・ガイダンスと学期中のきめ細かな学習相談の必要性がこれからますます高まるであろうと思われる。

### {男女共学について}

高校の家庭科男女共修が進むなかで、表9のように、「男性自身のためによいことだと思う。」という意見が、83.4%(複数回答)と大多数を占めた。ここで注目すべき点は、「女性のためによいことだと思う。」という回答(42.4%)を上回ってこの答えが支持された点にある。ジェンダーの問題は、「男性も女性と同じくらいにジェンダーに囚われていること。」にある。今回のこの調査結果は、「家事役割を手助けしてもらうために、家庭科が男子にも必要だ。」と女子学生が考えているわけではなく、「当然だと思う。」(55%)を考慮しても「男性にとって、家庭科は必要な科目だから履修の機会が保障されて当然である。」と考える者が大多数を占めることを表していると思う。

しかし、「家政系の学部で男女共学の大学があることを知っていますか。」という設問に対しては表10のように約70%の者が、知らないと答えている。さらに「男女共学の家政系学

部で学んでみたいか。」という質問については、約58%の者が学んでみたいと積極的に答え、「時と場合による。」と答えた者も合わせると、約69%の者が肯定的であった。(表11) このように、高校では家庭科に対して男女共修の道が開かれたのに、大学・短大ではいまだ、男子学生を家政系学部を受け入れる所は少なく、知名度も低い。しかし家政系で学ぶ学生達は自分達も男子学生といっしょに学びたいと答えるものも多い。表12のように、家政系男女共学について、高校の男女共修と同様、71.3%が、「男性自身のためにいいことだと思う。」と答えている。さらに自由回答でなぜ男女共学の学部が必要なのかと質問してみると、「男女平等の時代だから。～18名」、「共働きが多いので男の人も家政を学んでよいと思うから。～7名」、「男性が一人で生活して行けるように～5名」「男性も家政科で学ぶ権利があるから～3名」と男性の家政系学問への門戸を開くことについて積極的な意見が見られた。

「女性だから、男性だからというジェンダーロールに囚われて家政系を学ぶのではない。」「就職という社会的役割に参加する道具としては、家政系は他に比べてストレートに理解されがたい。」「高等教育が2年だからというのは、女だからという理由ではない。」以上のような声が調査結果から読み取れる。家政系短期大学は、今極めてアンビバレントな状況にあると思われる。おりしも、「家政系」の名称が、生活をめぐる様々な学問分野に広がることによって、女性の学問といったイメージは払拭されてきている。しかし、入学側の学生の立場に立てば「専門として職業にいかせるものは何なのか。」それとも、「自分の生活を楽しむために、情報、技術を身につけることを習得するのか。」「社会生活をよりよく改善していくための知識・技術を身につけ、企業人としてだけではなく、地域や弱者のために働くことをめざすのか。」と理解は拡散している。

もちろん家政系の学問は、他の学問と同様に「学生が何かになるため」だけに用意された学問ではない。しかし、かつては「良性賢母」として家政学をとらえ、家政系短大においても、「家事学的意味合いの教育内容」に重点がおかれた時代もあった。「家政系短大生が主婦になる。」時代は終わり、現在はジェンダーロールを超えて生活を基盤とした学問に光が当てられ始めた今、以前と180度展開が変わった事実を真摯に受け止めて学生に説明できるように機会を持つ必要がある。つまり、家政系こそが、ジェンダー視点を積極的にとらえ、ジェンダーイキティを発信できる学問であることを学生に明確に示すことが大切である。例えば資格がとれるなら、その資格が女性向きの資格であるからでなく、従来女性によって担われてきたが、両性に開かれた資格であることを強調する必要があると思われる。また、家政系が卒業生を送り出してきた職域が、アンペイドされた領域（主婦や社会福祉領域など）にあるならば、アンペイドされた歴史や思想を学問領域とすることで、問題関心を持つ必要がある。

表10 男女共学家政系学部知名度

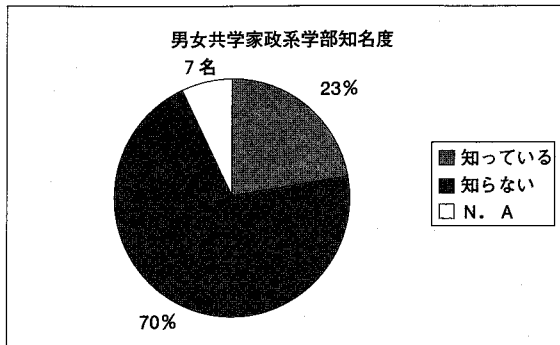


表11 共学希望度

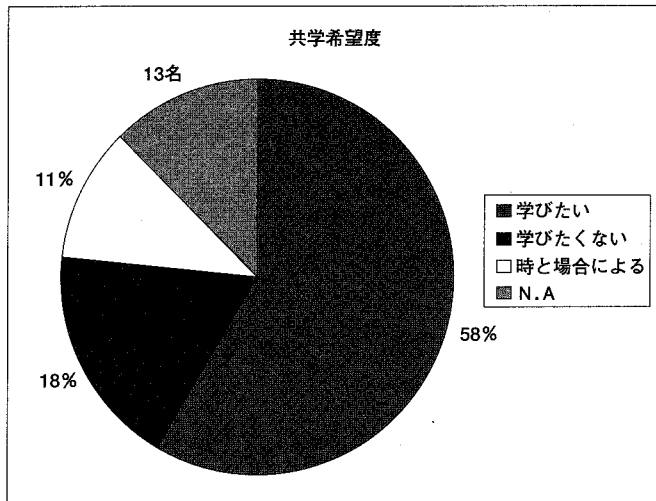
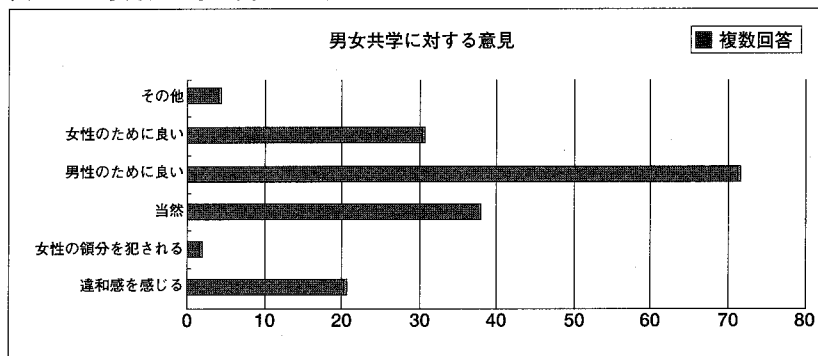


表12 大学男女共学に関する意見



### {調査結果のまとめ}

今回の調査結果から明らかになったことを概観すると、短大教育の送り手と受け手の間には、様々なギャップが存在していることがわかる。学生の多様な層が入学してくる。はっきりとした専門志向を持って来る者、入学してもいまだ学習目的もはっきりせず悩んでいる者、短大家政系教育を花嫁修業と考えて来る者など、一つの型では理解し得ない。そして今後この傾向はますます強まるであろうと思われる。各短期大学においても、科学技術の高度化、国際化、情報化の進展、生涯教育社会への移行などの社会の変化や女子学生の専門職業志向への高まりなど、短期大学をめぐる状況の変化を踏まえ、現在改革が進められている。このような双方の変革期だからこそ、今回の調査結果に見られるような家政系短大をめぐる問題が顕在化したのである。

問題を分析すると、二つの問題にわけて考えることができる。一つは、教育を提供する短大側の問題である。

- 1) 2年間の間に専門教育、教養教育双方をするわけだから、凝縮したスケジュールに為らざるをえない。
- 2) 教養教育としても、幅広い教養、豊かな人間性、総合的判断力など、じっくり醸成する時間を取り難い。
- 3) 専門教育の結果、その専門を生かせる職業には必ずしもついていない。
- 4) 必修に縛られて選択の幅が少ない。選択科目の決定に関してもアドバイスの機会が少ない。
- 5) 家政系から名称変更する中で、何を対象として学のか、学生にわかりやすく説明する機会が少ない。

もう一つは教育を受ける学生側の問題である。

- 1) 学生側の問題意識が、(例えば短大で何を目的として学のか。)希薄である。
- 2) 基礎的知識や技術が欠けていたり、学生間の能力の幅が広がりつつある。
- 3) 高校の家庭科教育を狭義にとらえて(例えば家政学を家事・裁縫学のように)短大の家政系・生活系教育の領域を限定する傾向がある。
- 4) 視野が狭く、授業の内容の即効性を求める傾向がある。
- 5) 受動的態度で授業に臨む学生が多く、積極的に学習に取り組めない。

このような問題を解決するために、家政系のカリキュラム・教育方法充実、学習スキルの訓練を提案したい。

#### ○カリキュラムおよび教育方法

- 1) 家政・生活系の教育全般がこれまでの生活、これからの生活にどのように関わるかを明示する。
- 2) 学生側の興味を喚起するために、オリエンテーションの期間と内容を充実する。

- 3) 基礎教育と専門教育とのつながり、高校までに習った教科とのつながりが明示される必要がある。
- 4) 基礎教育の補習のために、グループ学習やティーチング・アシスタントによる個別学習など有効な方法を工夫する。
- 5) 学生にとって親近感を持つ表現方法（イラストやビデオなどの利用）を用いて、効果的に指導する。

○学習スキルの訓練

- 1) 各講義、実験で必要とされる学習スキルで共通化できること、例えばレポートの書き方、プレゼンテーションの仕方、基礎実験の方法など訓練する機会を設ける。
- 2) 学習スキルの訓練のためには、適時のしかも妥当な評価がされて、くりかえしチャンスが与えられることが大切である。
- 3) 学内施設（図書館など）や学外施設の利用に関しても、具体的なテーマを課題として与えてその利用法を教える機会がほしい。
- 4) メリハリのある学習スキルの訓練にするために、ハレの場を設けたり、イベント性を持たせることが大切である。

参考文献

- 1) 「女子の4年制大学への志向強まる。」、竹田和彦、教育と情報 平成8年10月号pp.27～pp.31
- 2) 「家庭科教育法」、伊藤晴枝他、1992、教育出版センター